

APCによるOAジャーナル掲載論文 九州大学における追加検討

九州大学附属図書館

副館長 吉田 素文

eリソースサービス室 大瀧礼二、沖政広

この度、九州大学附属図書館の副館長の吉田先生、eリソースサービス室の大瀧様、沖様から、九州大学におけるOAジャーナルの論文数の傾向について分析されたレポートをいただきました。

九大の吉田先生は、増大する電子ジャーナル経費の見直しにおいては、従来の購読型ジャーナルだけではなく、OAジャーナルも視野に入れなくてはならない、現場の大学教員はAPCと論文投稿料の区別がついていない可能性があることも考慮に入れなくてはならないというご意見をお持ち、ということで、今回のセミナーのAPCというテーマに関連して、九州大学として何かコメントがあれば、ということで、今回のスライドをご提供いただいた次第です。

方法

- 「オープンアクセスジャーナルによる論文公表に関する調査」に準拠し、「APCによるOAジャーナル」とされた857タイトルを用いて、Scopusに収録された九州大学(以下、九大)の研究者による論文数について追加検討しました。
- 857タイトルのリストをご提供くださった東北学院大学佐藤義則先生に改めて感謝申し上げます。

SPARC Japanの調査では、APCによるOAジャーナルとして857のタイトルリストを例示させていただきました。

九州大学では、電子ジャーナルの選定などの参考のために、SCOPUSのデータを購入されたとのことです。

今回は、この研究者の論文数のデータに、APCによるOAジャーナル857タイトルをマッチングして、OAジャーナルの論文数を算出されました。

調査報告書から: 全体 vs 国内

	2010年	2011年	2012年	
総論文数	1,489,753	1,598,475	1,657,210	
国内研究者による総論文数	82,730	84,951↑	85,507↑	①
総論文数に国内研究者の論文が占める比率	5.55%	5.31%↓	5.16%↓	①
OAジャーナルへの掲載論文数	68,892	91,781	114,079	
総論文数にOAジャーナル掲載論文が占める比率	4.62%	5.74%↑	6.88%↑	②
国内研究者によるOAジャーナルへの掲載論文数	3,610	4,638↑	6,177↑	
国内研究者による総論文数にOAジャーナル掲載論文が占める比率	4.36%	5.46%↑	7.22%↑	②

SPARC Japanの調査報告の前半に、予備調査として世界全体および国内の論文数の傾向を示しておりますが、この表はそちらと同じものです。

2010年から2012年にかけて、総論文数は、148万から165万へと増大しています。一方、

国内研究者の論文数は増加しているが、総論文数に占める比率は縮小傾向にあり、ゆゆしき事態であった。

総論文数にOAジャーナルへの掲載論文数が占める比率は、全体vs国内で年次変化も比率もほぼ同等であった。

今回の追加検討: 国内 vs 九大

	2010年	2011年	2012年	
国内研究者による総論文数	82,730	84,951↑	85,507↑	
九大研究者による総論文数	4,457	4,947↑	5,036↑	①
国内研究者による総論文数に 九大研究者の論文が占める比率	5.39%	5.82%↑	5.89%↑	①
国内研究者による OAジャーナルへの掲載論文数	3,610	4,638↑	6,177↑	
国内研究者による総論文数にOA ジャーナル掲載論文が占める比率	4.36%	5.46%↑	7.22%↑	③
九大研究者による OAジャーナルへの掲載論文数	134	129↓	230↑	②
九大研究者による総論文数にOA ジャーナル掲載論文が占める比率	3.01%	2.61%↓	4.57%↑	② ③

先ほどのスライドの表に、九州大学の論文数の状況を追加したものがこちらの表です。

九大研究者による総論文数は増加しており、国内研究者による総論文数に占める比率は増大傾向にあった。

九大研究者によるOAジャーナルへの掲載論文数は、2011年に一旦減少しており、2012年には2010年の1.7倍へと増大した。

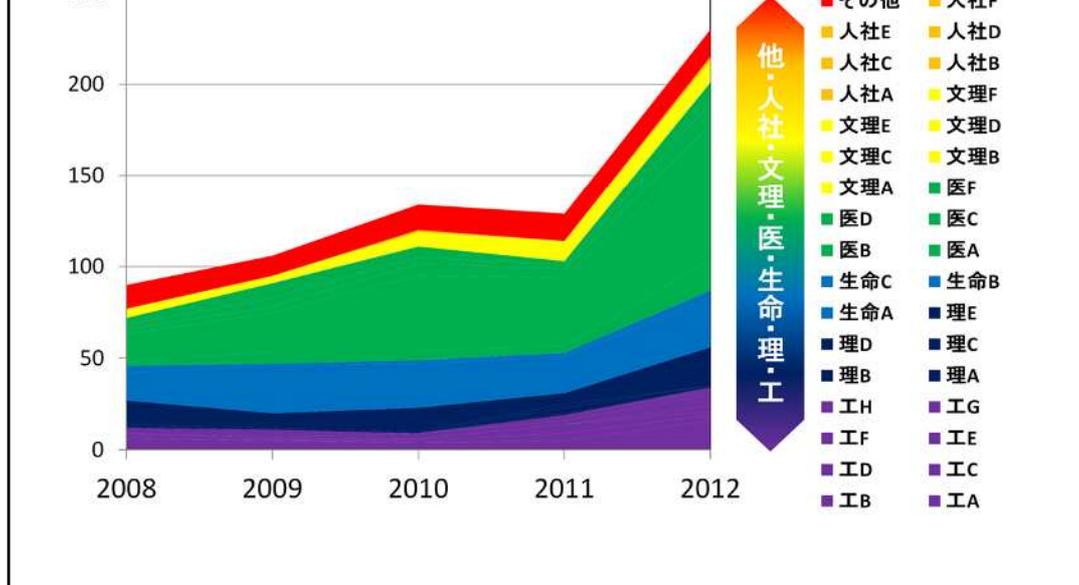
九大研究者による総論文数にOAジャーナルへの掲載論文数が占める比率は、国内研究者によるものよりも小さかった。

なお、

「九大研究者による総論文数」と「九大研究者によるOAジャーナルへの掲載論文数」の項目は、複数部局の研究者による共著論文を、重複してカウントしているため、実際の論文数とは異なる可能性がある

とのことです。(同じ部局内での共著は、重複を排除してカウントしているとのことです)

九州大学の各部局における OAジャーナル掲載論文数



先ほどの論文数について、著者ごとの所属で分類したときの表です。

九大研究者によるOAジャーナルへの掲載論文数は、2011年に一旦減少していたが、2008年から見ると増大傾向であり、2012年は複数の部局で急増していた。

部局別にみると、OAジャーナルへの掲載論文数は、工学系、理学系、生命科学系、医学系がその多くを占めていた。

まとめ

- 九州大学におけるOAJへの論文掲載状況は全体・国内平均より比率は小さいが、論文数も比率も急増傾向である。
- 従って、APCによるOAJについては、APCの予算や悪徳出版社への投稿も含め、対応について検討を始めなければならない。
- 今回、学内のステークホルダーを把握することができた。

今回の九州大学での調査分析を通して、九州大学としてOA論文数が確かに伸びていること、また、どの分野が多く占めているのかが判明しました。

九州大学におけるOAジャーナルへの論文掲載数の比率は、国内平均よりも低いものの、スライド5にあるように全体として増加傾向であり、このようなエビデンスを基に、APCの経費を大学として今後どう考えていくか、OAジャーナルへの掲載の際に問題となる悪徳出版社をどう排除していくかなどについて、検討の必要性を再認識することとなった。

また、九州大学では、平成19年度から電子ジャーナル購読料の一部を全学共通経費から支出している。

今回の検討で明らかになった、研究成果の発信先としてAPCによるOAジャーナルの比率の増大が継続すれば、将来的にAPCの一部を全学共通経費化することについて検討する可能性があると考えている。

その際、APCによるOAジャーナルへの掲載論文数が多い部局、少ない部局を、各々の意味におけるステークホルダーとして認識しておくことは重要だと認識している。